

特別講演 1

「免疫抑制状態における肝炎ウイルス対策」

京都大学大学院医学研究科 消化器内科講師

上田 佳秀 先生

抗がん剤や免疫調節薬の進歩はめざましく、様々な分子標的薬が開発されたことも加わって、癌、自己免疫疾患、臓器移植などの多くの分野で長期に病勢をコントロールできるようになった。しかしながら一方で、長期の免疫抑制状態が感染症のリスクを増加させる。特に B 型肝炎ウイルス(HBV)の活性化については、生じると重症化し致死的となる可能性があることから、近年その現状と対策についての議論が活発に行われ、本邦でも「免疫抑制・化学療法により発症する B 型肝炎対策のガイドライン」が作成された。このガイドラインを理解し、さらに適切な対策法を考えていくためには、ウイルス性肝炎の検査と病態を十分に理解することが重要である。

抗がん剤、免疫抑制剤投与前など、免疫抑制状態になることが予想される症例に対して必要な肝炎ウイルス検査は、HBs 抗原、HBc 抗体、HBs 抗体、HCV 抗体の 4 つである。さらに、陽性者には HBV-DNA や HCV-RNA 検査を追加する。これらのマーカーによって、HBV キャリア、HBV 既感染者、HCV 陽性者を正確に判断し、それぞれの病態に応じた肝炎ウイルス対策を行う必要がある。

本講演では、免疫抑制状態において必要な肝炎ウイルス検査の内容とその結果が意味する病態、それぞれに対する対策法とその根拠について、すべての診療科の医師に必要な知識を整理して概説する。